

黒死病後の社会

— 繰り返すペスト被害と都市の疫病対策 —

渡 邊 裕 一

はじめに — 自己紹介に代えて

はじめまして、福岡大学人文学部の渡邊裕一と申します。

このたびは、成城大学経済研究所での貴重な講演機会をいただきまして、誠にありがとうございます。何卒よろしくお願い申し上げます。私の勤務しておりますのは、経済学部ではなく、人文学部の歴史学科というところですが、初めから言い訳じみたお話で恐縮ですが、経済学については疎いところもあり、皆様方のご関心に沿うお話ができるかどうか心許ないのが正直なところです。

私は現在、中世後期から近世にかけての帝国都市アウクスブルクにおける公衆衛生と健康ポリツァイの実態解明を目的とした研究プロジェクトに取り組んでおります¹⁾。そこで本日は、パンデミックを経験した現在の時点から、疫病の歴史について論じることの意味を、人文学、とくに歴史学を専門にした一研究者の立場からもろもろ考えたことをお話したいと思います。新型コロナウイルス感染症パンデミックのなかで疫病の歴史について考えることは、今後の社会経済の動向を考えるうえでも非常に重要な作業になるはずですが。

まずは、自己紹介として、これまでの私の研究について、簡単にご紹介することから始めたいと思います。これまで私は、中近世ヨーロッパの都市史を専門に研究を進め、とくに帝国都市アウクスブルクを事例に、都市の生活必需品供給（とくに木材・燃料材に注目）²⁾および水管理政策の実態を解明する実証研

1) 科研費・若手研究「中近世アウクスブルクにおける公衆衛生と健康ポリツァイ：ペスト対策を中心に」(2022年度～2024年度)。

2) 博士論文では、16世紀アウクスブルクにおける木材供給および森林政策について、森林

究³⁾を積み重ねてきました。研究を進めるうえで意識的に重視してきたのは、単なる一都市の事例研究に終始することなく、都市という人々の密集した生活空間における人間と自然環境とのかかわりを総体として理解し、全体史の枠組

みのなかで都市環境史を構想する視点です⁴⁾。さらに、環境史の視角から中近世ドイツ都市の全体像を把握してみたいという思いから、都市の燃料材供給および水資源の管理政策にくわえ、ペストを含む感染症に対する都市の疫病対策についても関心をもつようになりました。まだ新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行する以前のお話です。

2019年2月、福岡大学人文学部歴史学科の同僚たちと『18歳からの歴史学入門』という高校生から学べる歴史学の入門書を出版しました⁵⁾。そのなかで私は、



書記会計簿の分析から都市のエネルギー供給をめぐる柔軟な対応を解明しました(博士論文は現在、アウクスブルク大学のリポジトリで公開されており、ウェブ上で閲覧可能です。

Yuichi Watanabe, *Waldpolitik und Holzversorgung der Reichsstadt Augsburg im 16. Jahrhundert*, Augsburg 2018 [URL: urn:nbn:de:bvb:384-opus4-378683]。日本語の成果としては、渡邊裕一「中近世アウクスブルクの木材供給—都市の森林所有とレヒ川の木材流送」『西洋史学』第241号, 2011年, 1-18頁; 同「貧民への木材供与—16世紀アウクスブルクの事例から」『エクフラシス』第2号, 2012年, 137-152頁; 同「帝国都市アウクスブルクの森林管理・行政」『史観』第171冊, 2014年, 86-103頁; 同「木材, 市場, 規範設定—中近世アウクスブルクの事例から」『比較都市史研究』第33巻2号, 2014年, 23-39頁等があります。

- 3) 例えば、渡邊裕一「中近世ドイツ都市における給水システム—帝国都市アウクスブルクの事例から(特集:環境史の課題)」『西洋史学』270号, 2020年, 64-78頁; 同「帝国都市アウクスブルクにおける水の利用とその管理(シンポジウム「ヨーロッパ史における水の資源化とその管理・統制)」『西洋史学論集』58号, 2021年, 56-61頁など、興味のある方はぜひご覧ください。
- 4) この点については、以下の論文でも論じております。渡邊裕一「アルプス山脈・レヒ川流域における森林労働と木材運搬—帝国都市アウクスブルクの史料から(〈特集〉近世・近代における都市と開発—環境史の視点から)」『メトロポリタン史学』第12号, 2016年, 5-25頁, とくに6-7頁をご参照ください。
- 5) 福岡大学人文学部歴史学科編『18歳からの歴史学入門』彩流社, 2019年。本書には、黒死病に関する拙論の他にも、松塚俊三先生の「コレラとイギリス近代社会」という論考が取

「災難の後に一ペストが流行れば金貸しが儲かる？」という論考を寄稿しています。私が疫病について初めてまとめた内容を論じたものですので、まずはこの拙論の内容からご紹介したいと思います。

1. 疫病史への関心と新型コロナウイルス感染症の世界的大流行

14世紀半ばにヨーロッパ全域を襲ったペスト流行については、高校の世界史教科書にも必ず説明があるように、数年の流行で全人口のおよそ3分の1もの人々の命を奪い去った恐ろしい疫病として知られています⁶⁾。「黒死病」と言った方がピンとくるかもしれません。ボッカチオの『デカメロン』の記述にあるように、甚大な被害をもたらした恐ろしい疫病として認識されている方がほとんどだと思います。

前述の「災難の後に」のなかで私は、14世紀半ばの「黒死病」の大流行期に、ペスト流行を免れた「空白地帯」が存在したことを指摘し、さらにペスト被害を免れたことが当該地域のその後の社会経済にどのような影響を及ぼしたのかという問いを立てました。帝国都市アウクスブルクについては、近年ドイツでも黒死病の被害を免れた「空白地帯」であった可能性が高いことが指摘されています。そこで拙論では、最新の研究動向を踏まえたうえで、当時ペスト禍を免れたことが都市アウクスブルクのその後の経済・社会の発展に間接的ながら大きな影響を及ぼした可能性について論じました。

ありがたいことに、拙論については、北村厚氏から「疫病の被害ではなく、被害がなかったことに着目したペスト研究はまさに逆転の発想であり、興味深い⁷⁾」と評していただき、また田口正樹氏からも「一般向けの叙述だが、問題

録されています。ペストとコレラを比較したうえで、疫病の近代を再考する論考で、とくに地方都市エクセタを対象に地域社会がどのようにコレラに向き合ったのかを史料から分析する手法は見事です。他にも興味深い論考がたくさん収録されておりますので、ご関心のある方はぜひ手にとっていただければ幸いです。

- 6) 世界史教科書のペスト記述については、藤井真生「西洋中世のペストと歴史教育」静岡大学人文社会科学部社会学科歴史学・考古学コース『歴史教育の地域的基盤を構築する教材・教授方法の実践と高大連携の進展』（2021年度人文社会科学部学部長裁量経費成果報告書）2022年、23-31頁が参考になります。
- 7) 北村厚「＜書評＞福岡大学人文学部歴史学科編『18歳からの歴史学入門』『九州歴史科学』47号、2019年、101-106頁、とくに103頁。

設定が明確な好論⁸⁾」との短評をいただきました。本論分の発表後の課題として、私自身も黒死病をテーマにして都市アウクスブルクの社会史をさらに深めていこうと漠然と考えておりました。そうしたなか、Covid-19というそれまで名前も聞いたことのなかった感染症の世界的な大流行が始まります。

皆様の記憶もまだ新しいかと思いますが、2019年の末頃から中国の武漢で新型の感染症が確認され、急激な速さで拡大が広がっているというニュースを耳にするようになりました。翌2020年になるとすぐに新型コロナウイルス感染症の文字が毎日の報道を埋め尽くすようになります。世界的な感染パニックが発生し、あれよあれよという間に私たちの日常生活も大きく様変わりしていきました。2月、横浜港に寄港したクルーズ船内で新型コロナウイルス感染者が確認され、船内での隔離・検疫がニュースを賑わしたかと思えば、すぐに市内感染も確認されるようになり、あとは息つく暇のないままに、事態はますます深刻化していきました。著名人の死去のニュースもあり、感染症に対する恐怖や不安が一挙に広がっていきました。3月の卒業式に引き続き、入学式も当然のように中止となり、4月には緊急事態宣言が出されました。これが一回目の緊急事態宣言になることも、当時はまだわかっていない状況でした。店頭からはマスクがなくなり、ドラッグストアの前を埋め尽くす異様な雰囲気を覚えていらっしゃる方も多いでしょう。

社会生活も一変しました。多くの大学で入構禁止措置が取られ、遠隔授業への移行を余儀なくされました⁹⁾。その時はまったく予想もできませんでしたが、新型コロナウイルスはウイルスの変異をともしつつ、その後も流行を何度も繰り返すこととなります。2021年にはワクチン接種も始まりましたが、感染状況は浮き沈みを繰り返し、感染拡大期には感染者および死亡者の数も急増していきました。新型コロナウイルスは、本講演録の原稿執筆中の2022年末現在でも終息にはいたっていません。

新型コロナウイルスの影響は、遠隔授業という技術面だけではなく、教育内容¹⁰⁾や私

8) 田口正樹「ヨーロッパ(中世—中東欧・北欧)2019年の歴史学界—回顧と展望—」『史学雑誌』第129編第5号、2020年、327頁。

9) 新型コロナウイルス感染症パンデミック下における緊迫した大学教育・研究の一端を回顧的に叙述した以下のエッセイもご参照いただければ幸いです。渡邊裕一「新型コロナ禍における歴史教育・研究実践」『七隈史学会会報』34号、2021年、25-29頁。

10) 私自身を振り返ってみても、2020年度後期の演習ゼミでは、新型コロナウイルスの感染拡大を踏

自身の研究にも少なからぬ影響を及ぼしました。さきほどご紹介した「災難の後に」では、帝国都市アウクスブルクが黒死病を免れた「空白地帯」であったことが、その後の都市の社会経済の発展に間接的ながらに大きく影響を及ぼしたことを論じました。しかし、14世紀半ばにヨーロッパを襲ったペストは、新型コロナウイルス感染症が何度も流行を繰り返したのと同様に、一度の大流行だけで終息したわけではありません。ペストは、その後の数世紀にわたってヨーロッパの各地で流行を繰り返し、被害を出し続けたことがわかっています¹¹⁾。そこで、帝国都市アウクスブルクに焦点を絞り、14世紀後半以降、数世紀にわたって繰り返し発生したペスト流行の実態と、都市社会における対応の変化を追ってみようと考えようになりました。当然、新型コロナ禍で現地での資料調査は難しかったのですが、中世後期のペスト被害を知るうえで主要な史料となる「都市年代記」は、史料集としてすでに刊行されているものが多くあり、それを手がかりに調査してみることにしました¹²⁾。都市年代記の記述を調べ始め

まえて、病気の歴史を共通テーマにいたしました。グループにわかれ、ペスト、コレラ、梅毒、ハンセン病、また結核やガンなど、世界史的にも大きな影響を及ぼした病気について調べることで、学生たちに新型コロナ禍の現状を相対化する視点を身に付けてもらうことを目的としました。対面・オンラインのハイブリッド形式での苦勞もあり、課題も多く残りましたが、新型コロナ禍でこそできる新しい試みも実施しました。立教大学経済学部で西洋経済史を担当されている菊池雄太さんと相談し、オンラインでの合同ゼミを開催しました。私のゼミからは、後期のグループワークの成果として、「疫病の社会史—ペスト、コレラ、梅毒」と「医学の進歩と病気—ハンセン病、結核、ガン」という二つの発表を行いました。関東圏の大学ともこのような形で合同ゼミを開催できたのは、オンライン化の効用の一つと言えるでしょう。渡邊「新型コロナ禍における歴史教育・研究実践」、26-27頁。

- 11) 井上周平「ペストの流行」石田勇治監編『ドイツ文化事典』丸善出版、2020年、98-99頁。中世後期から近世にかけてのより長期的な視点から、ペストの歴史を分析する研究も少なくありません。例えば、石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか：ペストと社会史から見る』ナカニシヤ出版、2017年；同『苦難と心性：イタリア・ルネサンス期の黒死病』刀水書房、2018年；井上周平「中・近世ヨーロッパのペスト流行—「ペストの医者」の装束にみる感染の理解」赤江雄一・高橋宣也編『感染る 生命の教養学 14』慶応義塾大学出版会、2019年などが参考になります。
- 12) 15世紀の半ばまで、ペスト被害に関する主な情報源はほぼ「都市年代記」に限定されます。帝国都市アウクスブルクは、南ドイツではニュルンベルクと並んで豊富な歴史叙述の伝統を有しており、史料集『14～16世紀ドイツ諸都市年代記』(*Chroniken der deutscher Städte vom 14. bis 16. Jahrhundert*)に収録された年代記を利用することが可能です。アウクスブルクの歴史叙述については、以下の文献があります。D. Weber, *Geschichtsschreibung in Augsburg. Hektor Müllich und die reichsstädtische Chronik des Spätmittelalters*, Augsburg 1984; G. Rohmann, *Textual Representation: Chronicles*, in: B. A. Tlusty/M. Häberlein (ed.), *A Companion to Late*

ると、帝国都市アウクスブルクでも、14 世紀後半から中小規模のペスト被害がおおよそ 10 年毎の間隔で発生し続けたことがわかってきました。

この調査の途中経過については、2020 年 9 月にオンラインで開催された福岡大学七隈史学会大会の外国史部会にてその成果の一部を発表することができました¹³⁾。新型コロナ・パンデミックのなかで初めて経験するオンライン授業の準備などもあり、十全な報告準備ができず、まだまだ生煮えの議論に終始しましたが、フロアからの反応や質問も多く、今後の具体的な分析課題なども見えてきました。また、感染症パンデミックで社会が混乱している現状だからこそ、疫病・感染症の歴史についてじっくり腰を据えて研究することの意義について、おぼろげながら意識するようになってきました。もちろん、ワクチンが存在しないなど全く前提条件が異なる時代ですので、安易な比較は控えなくてはなりません。しかし、過去に繰り返し生じたペスト禍とその周期的な来襲について確認する作業が、未知の感染症であった新型コロナの感染拡大という未曾有の現状下で不安や恐怖が蔓延する現代社会であるからこそ、大きな意味のある問題提起にもつながるだろうという予感は、研究発表等を通じて少しずつ確信へと変わっていきました。

2. ペスト被害の通時的考察 — 共同研究の成果 その 1

Covid-19 の世界的流行は、これまで猛威を振るってきた数多くの疫病の歴史に対する一般的な関心を引き起こすことになりました。カミュやデフォーの『ペスト』がペストセラールとなり、皆様のなかにもこれを機に読み直された方もいらっしゃるかと思います。スペイン風邪¹⁴⁾やコレラと並び、中世後期にヨーロッパ全域を襲ったいわゆる「黒死病」は、これまでも歴史学や医療史の研

Medieval and Early Modern Augsburg, Leiden 2020, pp. 69-98.

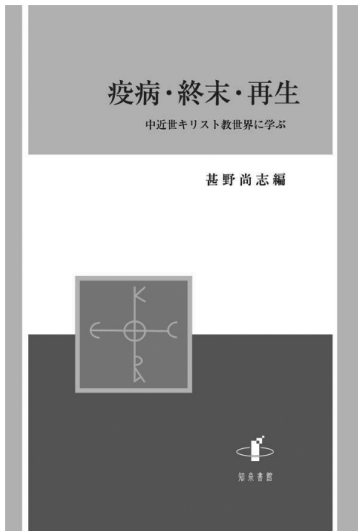
- 13) 報告の内容については、渡邊裕一「〔報告要旨〕中世後期～近世ドイツ都市におけるペスト被害の通時的考察 — アウクスブルクの事例から」『七隈史学』23 号、2021 年、27-28 頁をご参照ください。
- 14) 新型コロナとスペイン風邪を比較考察した代表的な論考として、藤原辰史「パンデミックを生きる指針 — 歴史研究のアプローチ」(<https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic>)があります。これは、新型コロナ感染症が流行し始めて社会が混乱の真ただ中にあった 2020 年 4 月 2 日に発表された歴史家の提言であり、大きな反響を呼びました。

究者のみならず一般的な関心を大きく集めてきました¹⁵⁾、新型コロナウイルス感染症のパンデミックのなかでさらにその傾向は強まったと言ってよいでしょう¹⁶⁾。「黒死病」が社会全体に及ぼした影響の大きさは、新型コロナウイルスという「未知」の感染症に直面した私たちの「これから」を考えるうえで、大きな示唆を与えてくれるはずであると考えられたためだと思います。

2020年には、疫病の歴史をめぐるシンポジウムや共同研究も各地で企画され、新型コロナウイルス感染症というパンデミック禍で歴史学の意味を問い直す書物も刊行されました¹⁷⁾。ヨーロッパ中・近世史の研究者が集まる早稲田大学の中世ルネサンス研究所（所長：甚野尚志教授）でも、2020年夏頃から「疫病・終末・再生」を共通テーマにした共同研究が始まりました。私もこの共同研究のメンバーに加えてもらい、上記の課題をさらに深化させることを目指しました。月に一度のペースでオンライン研究会を実施し、メンバー間での議論を繰り返しました。私も2020年10月18日に「帝国都市アウクスブルクにおけるペスト被害とその対策—14世紀から16世紀初頭まで」と題した報告をさせていただき、質疑応答を通じて、さらに議論をブラッシュアップさせることができました。

この共同研究の成果は、2021年10月に『疫病・終末・再生』として刊行されました¹⁸⁾。私も自身の研究成果を執筆させていただき、「中世後期アウクスブルクにおける「大量死」—ペスト被害の通時的考察」という論考を寄稿しました。以下、本論文の内容をいかにつまんでご紹介したいと思います。史料や

-
- 15) 日本でも、「黒死病」については、翻訳書や一般向けの良書が多く刊行されてきました。例えば、クラウス・ベルクドルト『ヨーロッパの黒死病—大ペストと中世ヨーロッパの終焉』国文社、1997年；ジョン・ケリー（野中邦子訳）『黒死病—ペストの中世史』中央公論新社、2008年（中公文庫、2020年）；宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版社、2015年；ノーマン・F・カンター（久保儀明、橋崎靖人訳）『〔新装版〕黒死病—疫病の社会史』青土社、2020年があります。さらに、歴史人口学や心性史、または記憶の問題なども踏まえた独自の黒死病研究の進展もみられます。例えば、佐々木博光「黒死病の記憶—14世紀ドイツの年代記の記述」『人間文化学研究集録』13号、2004年；石坂尚武「黒死病でどれだけの人が死んだのか—現代の歴史人口学の研究から」『人文学』189号、2012年などの研究をぜひご参照ください。
- 16) 例えば、小田中直樹『感染症はぼくらの社会をいかに変えてきたのか』日経BP、2020年の議論をご参照ください。
- 17) 歴史学研究会編、中澤達也・三枝暁子監修『コロナ時代の歴史学』績文堂出版、2020年。
- 18) 甚野尚志編『疫病・終末・再生—中近世キリスト教世界に学ぶ』知泉書館、2021年。



研究文献などの詳細な出典情報については、ぜひ本書を直接ご確認いただけましたら幸いです。

本拙論の問題意識は、以下の通りです。14世紀半ばにヨーロッパを襲ったペスト禍は、前述のように、一度だけの流行で終わりを告げたわけではなく、繰り返しヨーロッパ各地で発生し大きな被害を出し続けました。数年毎に襲ってくるペスト禍に対し、当時の人々はどのように対応したのでしょうか。ペスト禍を経るごとに、疫病対策はより有効なものへと変わっていったのでしょうか。過去の被害体験や記録あるいは記憶は、予防対策の構築にどのような役割を果たしたのでしょうか。このような問いに答えるためには、一つの都市を対象を絞り、数世紀に及ぶ時間枠でペスト禍の歴史を通時的に見ていく必要があります。そこで本拙論では、黒死病の時代から15世紀末に至るまで、アウクスブルクを襲ったペスト被害を通時的に考察することを試みました。以下、詳細を見ていきましょう。

黒死病期～14世紀後半

さきほどもご説明した通り、南ドイツの都市アウクスブルクは、14世紀半ばの黒死病の被害を運よく免れた「空白地帯」であったことが指摘されており、近年ではそれが研究者たちの共通認識になっています¹⁹⁾。それでは、帝国都市アウクスブルクにおけるペスト被害の始まりはいつだったのでしょうか。「黒死病」後の疫病被害について、ベネディクト派修士クレメンス・ゼンダー(1475-1536)が、1358年と1362年の「大いなる死(大量死)²⁰⁾」を記録してい

19) 渡邊「災難の後に」をご参照ください。また、「空白地帯」を主張する研究には、以下の論考があります。R. Kießling, Der Schwarze Tod und die weissen Flecken. Zur Großen Pest von 1348/49 im Raum Ostschwaben und Altbayern, in: *Zeitschrift für Bayerische Landesgeschichte* 68-1 (2005), S. 519-539; R. M. Krug, Pest in Augsburg 1348-1351? Eine Studie zur Frage eines Pestvorkommens zu Zeiten des Schwarzen Todes in Europa, in: R. Kießling (Hg.), *Stadt und Land in der Geschichte Ostschwabens*, 2005, S. 285-321.

ます。しかし、ゼンダーによる16世紀の記録以外には兩年の疫病蔓延を伝える同時代史料は残っておらず、どうも信憑性に乏しいと言わざるを得ません。研究者の間でも、この二つのペスト被害の存否について意見が分れており²¹⁾、事実を確定するのはなお難しい状況にあります。

14世紀後半～15世紀初頭 — 1379/80, 1389, 1398, 1402(?), 1407年

複数の年代記史料からペスト被害の発生が確認できるのは、1379/80年の疫病流行です。ある年代記では、1379年に「甚大な疫病」が蔓延し、人々は「悪魔の誘惑で自暴自棄に陥った」と記されています。また、後で詳述するツィンク年代記にも、翌1380年に都市でも農村でも「大なる死（大量死）」がやってきて、「農村地帯では人々の半数以上が亡くなった」との記述があります。作物は収穫されず、農地の多くは翌年も耕作されないまま残されたようです。このときの疫病の蔓延について、ツィンクは「ひどくショッキングな出来事で、すべての民衆に絶望をもたらした」と記しています。これらの記述からは、当時の人々がペスト禍に対して周到な準備をしていなかったこと、そして疫病の拡大とそれがもたらす「大なる死（大量死）」を大きな驚きをもって受けとめたことが読み取れます²²⁾。

このような「大なる死（大量死）」を前にして、人々にできることは限られていました。「黒死病」のさいにも各地で典型的に見られたように、1380年に疫病が流行したアウクスブルクでもやはり「宗教的な反応」が観察されます。危機の時代に普遍的にみられる典型的な解釈モデルとして、疫病の蔓延や自然災害は、人々の罪に対する「神の怒り」、つまり「神罰」とであると認識されて

20) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、139-140頁。拙稿では、史料用語として登場する *grosser Sterben* を「大量死」と翻訳しました。しかしその後、この史料用語は死者数の規模を表すだけでなく、「死」の存在そのものが「大きい」という意味で「大なる死」を含意しているのではという指摘をいただきました。この点をご教示いただいた井上周平氏に、この場をお借りして、感謝申し上げます。

21) K. P. Jankrift, *Henker, Huren, Handelssherren. Alltag in einer mittelalterlichen Stadt*, Stuttgart 2008; M. Horanin, *Die Pest in Augsburg um 1500. Die soziale Konstruktion einer Krankheit*, 2019: [URL: <http://hdl.handle.net/11858/00-1735-0000-002E-E61D-4>]; K. P. Jankrift, *Der übermächtige Feind. Seuchen im mittelalterlich-frühneuzeitlichen Augsburg*, in: D. Schiersner (hg.), *Augsburg - Stadt der Medizin. Historische Forschungen und Perspektiven*, Regensburg 2021, S. 134-149.

22) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、140-141頁。

いました²³⁾。神に怒りを収めてもらうために、人々は祈祷や行列、断食や聖人へのとりなし、そして様々な形式での教会への寄進や寄付といった宗教的な行動に出たのです。例えば、アウクスブルクでも1379年6月4日と1380年9月15日に、聖職者を先頭にした壮大な行列が行われた様子をツィンクが伝えています。「都市では立派な行列が行われ、神様が我々にその慈悲深さをお示しになり、都市および農村で起こっている大いなる死(大量死)を止めてくれるよう、神様に祈りが捧げられた」と²⁴⁾。

1389年、1398年にも「大いなる死(大量死)」がやってきて、人々は疫病の流行に対して行列を組み、各市門において聖書の聖句を読誦して回ったという記録が残っています。ただし、両年のペスト被害の詳細については、これ以上は何もわかりません。1402年にもペスト被害の記録が残っていますが、これを伝える年代記史料はすべて近世以降に作成されたものであり、実際に疫病が流行したのかどうかその信憑性は疑わしいでしょう。1407年の疫病被害については、同時代を含む複数の年代記で記録が残されており、この年にペスト被害が発生した蓋然性は高いと言えます。ただし、年代記の記述はどれも短く、内容も淡泊で疫病被害の実態はほとんどわかりません²⁵⁾。

15世紀前半～15世紀半ば — 1420, 1430, 1438/39, 1462/63年

ペスト被害の実態が多数の年代記からうかがい知れるのは、1420年にアウクスブルクを襲った「大いなる死(大量死)」の事例です。このときの被害は甚大で、16,000名もの被害者数を伝える年代記もあるほどです。ただし、当時の都市人口数を考慮すると、これは典型的な誇張表現であると考えてよいでしょう²⁶⁾。ペスト被害は、1420年秋ごろから激しさを増していったようです。

23) 「神罰」としての自然災害については、甚野尚志「災害を前にした人間」甚野／堀越宏一編『中世ヨーロッパを生きる』東京大学出版会、2004年、81-98頁が参考になります。「黒死病」期における神罰理解については、宮崎『ペストの歴史』、88-89頁を参照ください。神罰としての自然災害という認識は、近世に至ってもなお残っていたことがわかっています。代表的な研究として、以下の文献だけ挙げておきます。M. Jakubowski-Tiessen / H. Lehmann (hg.), *Um Himmels Willen. Religion in Katastrophenzeiten*, Göttingen 2003.

24) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、141頁。

25) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、142-143頁。

26) 14世紀末の時点でおおよそ12,000人であった人口数は、15世紀末の時点で19,000人ほどに増加したと言われます。ここからも、16,000人の被害者という年代記の記述は誇張であ

疫病が蔓延し、感染が拡大するにつれて、富裕な市民の多くが都市から逃げ出していきました。しかし、ペスト禍のアウクスブルクから逃避した人々のなかには、すでにペストに罹患した者も少なくありませんでした。運悪く避難先で亡くなってしまった者のなかには、その遺体が埋葬のために再びアウクスブルクへと運ばれたという事例もみられます。アウクスブルクに搬送されたペスト遺体の埋葬に関しては、当時の都市と教会の対立関係を背景にして、遺体の掘り起こしをめぐる紛争が発生しており、注目に値します。ここでは詳細は省きますが、疫病蔓延のパニック時に、普段は隠れている潜在的な敵対意識が可視化される興味深い事例ですので、事の顛末については、ぜひ拙論を読んでいただければと嬉しいですね²⁷⁾。

10年後の1430年、再び疫病がアウクスブルクを襲いました。1431年初頭まで流行は続き、今回も6,000名もの被害者が出たという記録が残っています。さらに10年もたたないうちに、アウクスブルクでは再び流行病が猛威を振ります。1438年、再び「大いなる死（大量死）」が到来し、被害者は今回も6,000名にものぼったと記載されています。疫病で亡くなった人々の大量の遺体を収容するために、大聖堂近くの聖ヨハネス門脇に「大きな墓穴」が掘られ、とくに自身の墓地を確保できなかった貧しい人々の多くがそこに埋められました。一方で、1420年の場合と同様に、豊かな市民の多くはアウクスブルクから逃げ出したようです。重要な役職にあった市参事会員や市長連中も逃亡してしまい、都市統治・行政にも人員不足が発生して、大きな問題となります。日々の行政業務にも支障が出たことから、今後はペストが流行し始めたら、少なくとも14日間は、市参事会員は輪番制で市内に留まり職務を全うすることが義務付けられるようになりました。当該期間に市外に逃げていた場合は、アウクスブルクへの帰還が命じられ、違反した場合には罰金支払いも課せられました²⁸⁾。

その後20年以上にわたりペスト発生記録はありません。再び疫病が蔓延し、「大いなる死（大量死）」がやってきたという記述がみられるのは、1463年

ると考えざるを得ないでしょう。J. Jahn, Augsburgs Einwohnerzahl im 16. Jahrhundert - ein statistischer Versuch, in: *Zeitschrift für Bayerische Landesgeschichte* 39 (1976), S. 379-396.

27) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」, 143-145頁。

28) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」, 145-146頁。

になってからです。すでに前年の 1462 年には、「いつもの流行病」で「赤痢」の症状が市内で見られるようになり、頭痛や全身のだるさを訴える人々も出ていました。これらは比較的軽症で、多くの人々はすぐに回復したといえます。しかし、1463 年夏になると、ペストは一気に市内で拡大していったようです。

ミューリヒという年代記作家の記述によると、1463 年 7 月 25 日から 12 月 13 日までに、およそ 9,000 人がペスト被害で亡くなったようです。ウルリヒ教区だけでも死者は 3,500 名にのぼり、およそ 3,000 名がアウクスブルクから逃げ出したといえます。ミューリヒ自身、1463 年 8 月 11 日に、家族とともにアウクスブルクからおよそ 30 キロ離れたシュヴァーブミュンヘンへと避難しました。9 月 29 日からの 4 日間、彼は一人アウクスブルクに戻って一時滞在していますが、その間にも 500 名の人々が亡くなったのを目撃しています。急いでシュヴァーブミュンヘンに戻った彼は、12 月 6 日にメミンゲンへと移り住みます。感染拡大が収まったアウクスブルクに彼が帰還したのは翌 1464 年 1 月に入ってからでした²⁹⁾。

あまりに多くの死者が出たため、従来の墓地だけではスペースが十分ではなくなってしまうようです。年代記作家たちは、この年のペスト被害で、市内に新たに計 9 つの墓穴が掘られたことを伝えています。教区内に自身の墓地を持たなかった貧しい人々のために作られた共同墓穴です。墓穴の立地や規模・深さも詳しく記録されており、200 体の遺体を一度に埋葬した墓穴もあったことがわかります³⁰⁾。

15 世紀後半～15 世紀末 — 1466/67, 1473, 1483, 1494/95 年

その後、1466/67 年、および 1473 年にもペスト被害を伝える年代記はあるものの、すべて近世以降の証言ばかりで、実際にアウクスブルクでペスト被害が生じたかどうかは不明です。1483 年については、クレメンス・ゼンダーがシュヴァーベン地域全域でのペスト流行について伝えています。他にこの年のペスト被害について伝える史料はなく、アウクスブルクでのペスト被害については知る術もありません。1494/95 年のペスト流行については、神聖ローマ帝国の広い範囲で被害をもたらしたという記録が残っています。この年のペス

29) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、147 頁。

30) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、148 頁。

ト被害は都市アウクスブルクでも甚大で、これ以降、都市当局による本格的なペスト政策が始動していくこととなる画期になったと言われます³¹⁾。これについては、後ほど詳しく論じてみたいと思います。

考察の結果

以上、都市年代記という限られた史料からではありますが、14世紀後半から15世紀後半にかけて、都市アウクスブルクを襲ったペスト被害の通時的な考察を試みた拙論の内容をご紹介します。実際にペスト被害が生じたかどうか不確定な年代もあり、また被害の規模等について不明な点も多いのは確かですが、ペスト流行の周期性ははっきり読み取れると思います。アウクスブルクでは、1379/80、1389、1398、1407、1420、1430、1438/39、1462/63、1466/67、1473、1483、1494/95年と、ほぼ10年に一度のペースでペスト流行が確認でき、大きな被害をもたらしたことがわかりました。「大いなる死（大量死）」への対応は、どのように変化していったのでしょうか。

14世紀後半の段階では、年代記における記述も宗教的な対応への言及が際立っていました。1420年のペスト被害では、逃亡先で亡くなった市民の遺体を市内の墓地に埋葬するかどうかをめぐり、都市と教会の対立が全面的に展開されました。ペスト被害者の遺体埋葬をめぐる騒動は、中世後期の都市で問題となっていた教会（司教）との潜在的な対立関係が、ペスト流行という危機的な状況のなかで顕在化した興味深い事例といえます。また、疫病蔓延時における富裕層の逃亡は、その後もずっと観察されるペスト時の典型的な対応です。ところが、都市行政の機能維持という点で、市参事会員や市長など重役たちの逃亡が問題視されるようになり、1430年末頃にはペスト蔓延中の市参事会員の市内滞在が義務化されています。さらに、貧民のペスト被害者の埋葬や共同墓穴への言及も15世紀半ば頃から増えていき、15世紀後半にはその詳細な実態（墓穴の大きさや立地など）も記録されるようになります。宗教的な対応に終始した14世紀後半の記述から、徐々にではありますが、遺体の埋葬方法や都市行政の機能維持など、現実的な対応に関する記述が増えていったことがわかりました。以上の考察から、繰り返し生じるペスト禍は、アウクスブルクの

31) Horanin, *Die Pest in Augsburg um 1500*, S. 125-130.

人々に、その都度の現実的な対応を強いると同時に、それらの経験の蓄積をももたらしたと結論づけました。

ツィンク家とペスト被害 — 疫病のファミリーヒストリー

拙論の議論は都市アウクスブルクの疫病対策に焦点を合わせましたが、当然、別のアプローチ方法も考えられます。上記の考察でも何度か引用したツィンク年代記は、疫病のファミリーヒストリーの可能性を示しています。ツィンクは生涯にわたって何度も繰り返し襲ってくるペストに向き合わざるを得ず、その経験を伝記および年代記のなかに記しています³²⁾。

1396 年にメミンゲンで生まれたブルカルト・ツィンクは、若い頃からアウクスブルク、ニュルンベルク、バンベルクなど、南ドイツの各地を放浪して回り、いろいろな経験を積んで成長していきました。1419 年からアウクスブルク商人のもとで働き始め、ここで結婚して家庭をもつようになります。1440 年にはアウクスブルクの市民権を得て、1450 年代から年代記を書くようになりました。ツィンクの年代記³³⁾から、ペスト被害を扱った箇所を取り上げてみましょう。

すでにアウクスブルクに住み着く以前にも、ツィンクは疫病で家族を亡くしています。メミンゲンにいた同名の父親ブルカルト・ツィンクは 1418 年に「流行病」で亡くなっており、翌 19 年にはメミンゲンにいる姉も疫病で命を落としています³⁴⁾。ツィンク自身、アウクスブルク定住後に何度もペスト被害を経験します。1420 年のペスト被害については、当時アウクスブルクにいた

32) ブルカルト・ツィンクと彼の自伝については、阿部謹也「中世後期の自伝二著 — トマス・プラッターとブルカルト・チンク」『ヨーロッパ中世の宇宙観』講談社学術文庫、1991 年、75-111 頁が参考になります。阿部はここで、ツィンクの自伝から「中世都市に住む若夫婦の暮らしぶり」、「市民権の取得と家庭生活」、「中世都市商人の生活感情」を読み解くだけでなく、さらに「史料に表現された〈心〉を読みとる」ことを試みています。家族の死について、以下のようにツィンクの特徴を述べています。「もうひとつの特徴はチンクがその自伝のなかで家族に死について詳細に報告している点である。母と父、姉妹、妻、子供の一人一人について死亡の年と月日、年齢、ときには墓所などを詳しく記している。このような記述はチンク以外にもみられるが、彼のばあいとくに自分とのかかわりが深かった者への思いがこもった文章となっている」(106-107 頁)。

33) Chronik des Burkard Zink. 1368-1468, in: *Chroniken der deutscher Städte vom 14. bis 16. Jahrhundert*, Bd. 5 (= *Die Chroniken der Schwäbischen Städte. Augsburg*, vol. 2), Leipzig 1866.

34) Zink, S. 135.

ツィンクもこれを目撃しており、その詳細を伝えています。前述した避難先で亡くなったペスト遺体のアウクスブルクへの搬送と埋葬、その遺体の掘り起こしに関するエピソードについても、ツィンクは詳しい記録を残しています。このとき亡くなったプッティンガーという名前の市民は「坊主嫌い」であったと記し、これが司教による遺体の掘り起こしの原因だろうと推察しているのも興味深い点です³⁵⁾。

1430年のペスト蔓延では、ツィンクは二人の娘を失いました。12月、9歳の長女アンナがペストに倒れ、翌1431年にはまだ3歳の娘ドロータもペストで命を落とします。二人の遺体は、聖母教会の墓地に埋葬されました。1431年11月、ツィンク夫妻は赤ちゃんをもうけましたが、この子には亡き娘と同じドロータという名前を付けています³⁶⁾。

1438年のペスト流行も、ツィンク家族に大きな被害をもたらします。「私ブルカルト・ツィンクもまたこの大いなる病に罹り、両腕、首筋、股関節に腫物ができた」。当時妊娠中であった妻エリザベスも病に伏せ、ツィンクよりも重症だったようですが、なんとか二人とも回復しています。「神様は二人が再び健康になることをお許しになった。神よ、称えられよ」³⁷⁾。11月3日、エリザベスは無事に赤ちゃんを出産しますが、12月12日には息子コンラートが疫病で命を落としてしまいます。ツィンク一家にとっても、繰り返し襲い掛かるペスト禍は大きな災いであったことがわかります。

1463年のペスト流行に関しても、当時アウクスブルクでこれを体験したツィンクは詳細な記録を残しています。ツィンクによると、この時のペスト流行では、とくに1462年10月6日から63年の9月29日までの一年間で合計10,000人がペストで亡くなったといます。その後、63年10月頃から徐々に感染は収まり、被害者も徐々に減っていきました。今回のペスト蔓延では、ツィンク自身と家族はみんな健康であり続けたようで、それについて彼は神様に感謝の念をささげています³⁸⁾。

ツィンクの年代記には、疫病の他にも、大小さまざまな災害についての記述

35) 渡邊「ペスト被害の通時的考察」、143-145頁。

36) Zink, S. 136.

37) Zink, S. 137.

38) Zink, S. 295.

が残されています³⁹⁾。アウクスブルク以外の地域で生じた自然災害についても、例えば、1419 年には都市メランで洪水により家屋や橋が損壊したことや、1447 年にはティロルのハルで死者 50 名を出す大火事が発生したことなどを伝えています。また、1450 年ローマで聖年が祝われ、テヴェレ川にかかる橋の上で混雑から 300 人以上が亡くなる大事故があったことなども記録しています。アウクスブルクでの疫病流行だけではなく、1467 年にはウルムとメミンゲンで発生した「大いなる死 (大量死)」についての記録もあります。気候の悪化による穀物や果物の不足、食肉等の物価高騰、食料不足による飢饉の記録も、ツィンクの年代記には多く登場します。ツィンクの年代記を分析することで、一家が経験した災害やペスト被害をファミリーヒストリーとして描き出すことも可能かもしれません。

本論文の評価と今後の課題

新型コロナ禍という緊急事態下で準備・刊行された『疫病・終末・再生』は、ヨーロッパ中近世史の研究者が専門領域の事例を通じて疫病による社会的・宗教的な影響を実証的に考察した共同研究の成果で、いくつか合評会も企画・実施されました。具体的には、高等研究所セミナーシリーズ【グローバル・ヒストリー研究の新たな視角】(2022 年 3 月 15 日、評者：関哲行氏、鈴木喜晴氏)、および早稲田大学西洋史研究会第 79 回大会(2022 年 7 月 9 日、評者：佐々木博光氏、坂本宏氏)にて合評会が開催され、私も参加しました。

本書全体の評価については、ぜひこの間に発表された書評等⁴⁰⁾をご覧くださいと思いますが、拙論については、合評会にて関氏および佐々木氏から貴重なコメントをいただきました。両者ともに、拙論に関して一定の評価をくださったうえで、さらなる課題をご提示くださいました。具体的には、関氏から

39) ツィンク一家を襲った災厄については、G. フーケー／G. ツァイリンガー(小沼明生訳)『災害と復興の中世史—ヨーロッパの人びとは惨禍をいかに生き延びたか』八坂書房、2015 年、23-31 頁をご参照ください。とくに 25-27 頁には、1417 年から 1467 年までにツィンクが経験した数多くの災害が一覧としてまとめられており、参考になります。

40) 本書の書評としては、梅津教孝「書評 甚野尚志編『疫病・終末・再生—中近世キリスト教世界に学ぶ』」『西洋史学論集』第 60 号、2023 年刊行予定、および川崎紘子「<書評・新刊紹介>甚野尚志編『疫病・終末・再生—中近世キリスト教世界に学ぶ』」『フェネストラ：京大西洋史学報』6 号、2022 年、50-51 頁がありますので、ご参照ください。

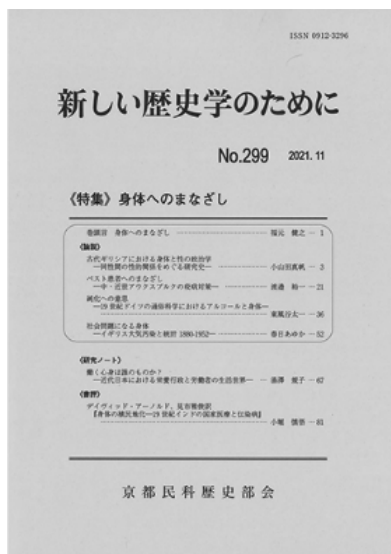
は、「ペストが「神罰」と認識されたとすれば、「神殺しの民」への反ユダヤ運動の存否は気になるところである。生じなかったとすれば、それはなぜなのか」とのご質問を、佐々木氏からは、「プロテスタントの出現はペスト対策に変化をもたらしたのか」というご質問を頂戴しました。佐々木氏の質問については、後述する拙論で少し論じていますが、まだまだ検討が不十分ですので、今後のさらなる考察が必要となるでしょう。関氏のコメントについては、目下、アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察に取り組み始めており、何らかの形でしっかりと応答したいと考えております⁴¹⁾。

3. 疫病対策としてのペスト病院 — 共同研究の成果 その2

2021年から2022年にかけて、新型コロナ感染症は、第3波、4波、5波、6波、7波と爆発的な感染拡大と鎮静化を繰り返し、世間では「医療崩壊」が現実の問題として話題となりました。医療関係者への差別も大きな問題となり、ワクチン接種は始まったものの、「コロナ疲れ」とも呼ばれる重たい雰囲気が世の中に蔓延した様子を皆様も覚えていらっしゃるはずです。「医療崩壊」とは、医療従事者や医療器具の不足、そして重症者を収容するための病床不足などが原因で、必要とされる医療が提供できない状況を意味する言葉です。病院だけでなく、介護施設等でもクラスターが発生したり、救急車が患者を乗せたまま収容する病院施設から受入を断られたりする切迫した状況を、皆様も報道で見られて記憶されているかと思います。一方で、世間ではオンラインを利用した働き方やソーシャル・ディスタンスも定着し、新型コロナ感染症への「慣れ」の感覚も広がって、医療現場と一般社会との緊張感のズレが浮き彫りになってきたのもこの時期だったかと思います。

繰り返すペスト被害を通じて、人びとの疫病認識はどのように変化し、そして社会の対応はどう展開していったのかという問いは、私の研究課題にとっても重要な問題です。2021年3月、京都民科研究会にて、「身体へのまなざし」をテーマとしたシンポジウムが開催され、私もお誘いいただき登壇者として研

41) この点については、中世ルネサンス研究所の第35回研究会にて研究報告を行いました。渡邊裕一「＜発表要旨＞帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察」『エクプレス』第13号、2023年、152頁。



究報告を行いました。コロナ禍の経験を経た地点から歴史的な「身体へのまなざし」を問い直すという本シンポジウム全体の問題提起を受け、上記の検討課題にアプローチを試みました。本シンポジウムの成果は、『新しい歴史学のために』(299号, 2021年)の特集「身体へのまなざし」として刊行され、私も「ペスト患者へのまなざし—中近世アウクスブルクの疫病対策」という論考を寄稿しました。以下、本拙論の内容をご紹介します⁴²⁾。

本拙論で重視したのは、周期的に襲ってくるペスト禍が人々の疫病認識やその後の感染症対策にどのような影響を及ぼしたのかを問うことです。さきほどご紹介した拙論「ペスト被害の通時的考察」で明らかにしたように、14世紀後半以降のアウクスブルクでは、およそ10年に一度のペースで疫病の被害を繰り返して来ました。近世アウクスブルクを生きた年代記作家ゲオルク・ケルデラーが描いた世界像を分析したB. マウアーは、繰り返されるペスト被害について、興味深い問題を提起しています。ペストのような感染症は確かに都市住民にとって大きな脅威であり続けたのは確かですが、それが周期的に繰り返し襲ってきたからこそ、「それほどセンセーショナルな出来事であるとは認識されていなかったのではないか」というのです⁴³⁾。16世紀のアウクスブルクでは、すでにペストは「未知」の感染症ではなくなっていたのです。拙論では、人々のペスト認識の変化や都市の具体的な疫病対策の展開について、とくにペ

42) 渡邊裕一「ペスト患者へのまなざし—中近世アウクスブルクの疫病対策(特集:身体へのまなざし)」『新しい歴史学のために』299号, 2021年, 21-35頁。

43) ただし、疫病流行に関する噂が住民に広がり、恐怖心が蔓延することを恐れた市参事会は、ペスト流行に関する情報が無暗に広がらないように努めていたようです。例えば、ペスト患者やペストで亡くなった死者たちと関わる都市の役人たちは、誓約のもと、ペストで亡くなった犠牲者の正確な数を漏らさないよう義務づけられていました。B. Mauer, "Gemain Geschrey" und "teglich Reden": Georg Kölderer - ein Augsburger Chronist des konfessionellen Zeitalters, Augsburg 2001, S. 299-305.

スト病院に注目して考察を加えました。まずはペスト病院設立の前提状況を整理しておきたいと思います。

15・16 世紀転換期におけるペスト対策の変化

前述したように、アウクスブルクで医学的なペスト認識に基づいてペスト対策が講じられるようになるのは、1494/95年のペスト流行が大きなきっかけであったとされています。1494年、アウクスブルクでもペストが猛威を振るいましたが、市参事会は医学的なペスト認識に基づいた条例を発するなど、これまでとは異なる本格的なペスト対策を展開しています。とくに重要なのは、1420年のペスト流行時に都市と教会との対立が顕在化したのとは対照的に、条例を発布する前に、市参事会は教会側とも事前に交渉をして、新たな墓地の造営について合意を得ていた点です⁴⁴⁾。さらに近年の研究では、1494年のペスト流行後に、市参事会がペスト患者を収容するための特別な施設を建設しようとしていたことが指摘されています⁴⁵⁾。

アウクスブルクでは、16世紀以降も周期的にペストが繰り返し流行し、その都度大きな被害を出しました。ペスト対策上の大きな変化として、1501年以降、アウクスブルクでは毎年の死亡者数および誕生者数を記録した「人口一覽表」が作成されるようになったことが挙げられます(次頁参照)⁴⁶⁾。1501年から1750年までの誕生者数、結婚数、死亡者数が一覽で示されており、ペスト等の疫病の流行とその被害の規模を知る上でも大変に重要なデータになります。いくつかの年代の横に黒い十字架が描かれていますが、ペスト等の疫病が流行して多くの人が犠牲となった年を示しています。それによると、1504、1505、1511、1512、1521、1535、1536、1547、1563、1564、1571、1572、1585、1586、1592、1607、1627、1628、1632-1636年に多くの人が亡くなったことがわかります。

44) 新墓地の造営については、Horanin, *Die Pest in Augsburg um 1500*, S. 126 をご参照ください。

45) 渡邊「ペスト患者へのまなざし」, 23頁。

46) Horanin, *Die Pest in Augsburg um 1500*, S. 131-134. 次頁の図は、Jankrift, *Der übermächtige Feind*, S. 141 より引用。

Geburts-, Hochzeit- und Sterbens-Register:
 Öffentliche Verkündung der Verkündung in dieser Stadt, bei der Staatliche Stadt-Apotheken nach Christi Geburt 1721.
 此の市に於ける出生の告白、結婚の告白、死の告白を公にする。西暦一千七百二十一年。

Die Wochentage				Die Mense				Die Quartale				Die Jahre			
Tag	Nachm.	Morgens	Gesamt	Tag	Nachm.	Morgens	Gesamt	Tag	Nachm.	Morgens	Gesamt	Tag	Nachm.	Morgens	Gesamt
1	24	24	48	1	22	22	44	1	24	24	48	1	24	24	48
2	23	23	46	2	21	21	42	2	23	23	46	2	23	23	46
3	22	22	44	3	20	20	40	3	22	22	44	3	22	22	44
4	21	21	42	4	19	19	38	4	21	21	42	4	21	21	42
5	20	20	40	5	18	18	36	5	20	20	40	5	20	20	40
6	19	19	38	6	17	17	34	6	19	19	38	6	19	19	38
7	18	18	36	7	16	16	32	7	18	18	36	7	18	18	36
8	17	17	34	8	15	15	30	8	17	17	34	8	17	17	34
9	16	16	32	9	14	14	28	9	16	16	32	9	16	16	32
10	15	15	30	10	13	13	26	10	15	15	30	10	15	15	30
11	14	14	28	11	12	12	24	11	14	14	28	11	14	14	28
12	13	13	26	12	11	11	22	12	13	13	26	12	13	13	26
13	12	12	24	13	10	10	20	13	12	12	24	13	12	12	24
14	11	11	22	14	9	9	18	14	11	11	22	14	11	11	22
15	10	10	20	15	8	8	16	15	10	10	20	15	10	10	20
16	9	9	18	16	7	7	14	16	9	9	18	16	9	9	18
17	8	8	16	17	6	6	12	17	8	8	16	17	8	8	16
18	7	7	14	18	5	5	10	18	7	7	14	18	7	7	14
19	6	6	12	19	4	4	8	19	6	6	12	19	6	6	12
20	5	5	10	20	3	3	6	20	5	5	10	20	5	5	10
21	4	4	8	21	2	2	4	21	4	4	8	21	4	4	8
22	3	3	6	22	1	1	2	22	3	3	6	22	3	3	6
23	2	2	4	23	0	0	0	23	2	2	4	23	2	2	4
24	1	1	2	24	0	0	0	24	1	1	2	24	1	1	2

Verkauft bey Johann Georg Seiferschmid Officij-Schreiber bey des Königl. Rathes-Præsidio in Wien.

1521年のペスト流行とペスト病院の設立

1521年、アウクスブルク周辺だけではなく、南ドイツ一帯やオーストリアでペストが大流行します。すでに前年の秋頃から市参事会は、外からの感染源の侵入に対して予防的な対策を始めています⁴⁷⁾。ペスト流入のリスクを回避す

るため、諸聖人の祝日および万霊節に外部からの貧民および乞食のアウクスブルクへの立ち入りを禁ずる措置に出たのです。この祝日には、例年、各地の貧民がアウクスブルクにやってきて市内で施しを集めて回るのを習わしとしていました。しかしこの年は、貧民らは市内への入ることを許されず、ヴェルタッハ橋門の外にとどまって、そこで施しを受け取りました。しかし、ペストがアウクスブルクに到来するのも時間の問題でした。

1521年6月、市内で初めてのペスト患者が確認され、聖ヤコブの祝日（7月25日）には死者も出始めます。ウルリヒ教区に関しては、さらに詳細な死亡者数の記録が残っており、市内で一気に感染拡大していく様子がうかがい知れます（右図参照）。8月6日からの一週間の死亡者は6名だったのが、その後、週に8名、11名、10名、15名、30名、33名、43名、53名と死者はどんどん増えていき、10週目には一週間の死亡者は96名にまで増大しています。その後徐々に死亡者数は減少していき、ようやくクリスマスが近づくにしがって一週間の死亡者数も一桁まで少なくなっていました。前述の人口数一覧では、1521年の死者数は3,895名、それに対して誕生者数2,970名と記録されています。1521年のペスト流行で多くの被害者が出たことが具体的な数値からもわかります。

アウクスブルクの市参事会は、都市が雇っている4名の医師に対し、効果的なペスト対策について所見を求め、その助言に基づいてさまざまな対策を講じています。なかでも最も重要な施策は、市外に大きなペスト病院を開設する

8月6日以降	死者数
1週目	6名
2週目	8名
3週目	11名
4週目	10名
5週目	15名
6週目	30名
7週目	33名
8週目	43名
9週目	53名
10週目	96名
11週目	78名
12週目	77名
13週目	41名
14週目	47名
15週目	48名
16週目	29名
17週目	26名
18週目	15名
19週目	24名
20週目	18名
21週目	17名
22週目	6名
23週目	6名
24週目	6名
25週目	6名
合計	749名

47) 以下の記述は、渡邊「ペスト患者へのまなごし」、24頁を参照ください。

ことでした。ペスト病院は、市壁の外、レヒ川とヴェルタツハ川が合流する場所に立地しており、医師たちの所見を参考にして市内からは完全に隔離された環境下にありました。ペスト病院は二つの建物をもち、16 世紀半ばの記録から、合計で約 150 名の患者がペスト病院に収容され治療を受けていたことがわかります。

ペスト病院に収容された患者たちは、ただ単に市内の健康な人たちから隔離されただけではありません。回復傾向にあった患者たちも、完全に回復するまでは、他の人々との接触を避けるよう規定されていました。患者たちは、男女で別々の部屋に区分され収容されていたようですが、より重要な区分は、治療中の患者と回復期の患者とを空間的に分けて収容することでした。二つの病院の建物には、回復した患者と、そうでない患者とが分けて収容されたのです。

ペスト病院で息を引き取る患者も当然多くいました。患者の移動やペストで亡くなった遺体の運搬には、特別な印をつけた荷車が使用されていました。この荷車の印の色は二つに分かれており、黒色は死者を、赤色はペスト患者を乗せて運んでいることを示したようです。ペスト病院に搬送された患者は、服を脱がされ、理髪師と院長の立ち合いのもとで、病床に寝かされました。患者の衣服は各自の部屋に保管され、回復して退院するさいに返却されることになっていました。ペスト病院で亡くなった患者の衣服は、例外なく、すべてが焼却処分されたようです。ペストで亡くなった人の遺体は、市内での埋葬を禁じられ、ペスト病院の近くに埋められました。

1521 年のペスト流行では大量の死者が出たため、市参事会は、墓堀人や遺体運搬人を臨時で雇い対応に当たらせています。彼らは、ペストのさらなる感染拡大を防ぐため、人々が集まる場所（例えば、公衆浴場や居酒屋）への立ち入りを自粛するよう命じられていました。彼らは名誉をもってペスト患者の遺体を取り扱い、地中深く適切に埋葬するよう命じられており、違反した場合には、罰金も科せられていました。埋葬作業の監視人も任命され、ペスト遺体の埋葬現場を監督したようです⁴⁸⁾。

以上、1521 年のペスト流行と市参事会による対策をみてきました。同時期には、すでにルターが登場し、宗教改革運動も各地で始まっておりますので、

48) 以上については、渡邊「ペスト患者へのまなざし」、25 頁をご参照ください。

前述した佐々木氏のコメントも踏まえて、墓地対策やペスト対策における宗教改革の影響などについては、今後のさらなる検討が必要かと思えます⁴⁹⁾。

ペスト病院への入院とその運営

ペストのような疫病の流行時には、大量の罹患者が発生します。創設当初のペスト病院は、当然、すべてのペスト患者を受け入れられたわけではありません。新型コロナ感染症の場合でも問題となっているように、病床数には限界があり、なにより当時はあらゆる病気に対応できるような総合病院はまだ存在していませんでした。それにペスト病院では、感染症という特性上、誰でも入居が許されるわけではありません。ペスト病院に入居できるかどうかを決定するうえで重要だったのは、専門家による事前の診断結果でした。この診断は、アウクスブルクでも学識のある医師が主導し、理髪師や外科医によって実施されました⁵⁰⁾。

ペスト病院は、ペスト流行時にだけ開く臨時施設で、通常時は閉まっています。市内でペスト感染が確認されてはじめて、市参事会はペスト病院の開館を決定しました。流行の噂で住民の間にパニックが発生しないように、医師・外科医による感染確認は慎重に実施され、感染に関する情報の拡散や漏洩は厳禁とされたようです。また、病院のキャパシティの問題もあり、すべてのペスト患者が病院に入れたわけではなく、自宅にて隔離生活を行う人々も当然たくさんいました。

ペスト病院には、上記の医師らによる診断で、ペストであることが確定した患者のみが受け入れられました。罹患者を疑われる人々は、自身で病院までやってきて、検査を受けました。まずは、都市の理髪師⁵¹⁾が、患者の身体を検査し、別の病に罹っていないかどうかをチェックします。感染が疑われる人物で、外

49) ペストにさいしての逃避をめぐるルターの神学的な考察については、佐々木博光「ペスト観の脱魔術化—近世ヨーロッパの神学的ペスト文書」『人間科学』7号、2012年、59-91頁が参考になります。

50) これについては、C. Stein, *Of Invisible Boundaries: Bodies, Plagues, and Healers*, in: B. A. Tlusty/M. Häberlein (ed.), *A Companion to Late Medieval and Early Modern Augsburg*, Leiden 2020, pp. 46-68 の議論が参考になります。

51) 1521年、瀉血や薬投与など、ペスト患者への医療提供のために5名の理髪師が都市に公的に雇われています。彼らは毎週1グルデンの報酬を得ており、もし就労中に亡くなった場合には、家族には損害賠償が行われたようです。Horanin, *Die Pest in Augsburg um 1500*, S. 148.

見からはペストの兆候がわからない場合には、医師のもとで診察を受けました。ペスト患者をペスト病院以外の施設に収容してしまうと、感染拡大でさらに多くの犠牲が出てしまうため、病院施設の受入を決める診察は極めて慎重に実施されました。また、ペスト病院に収容された人物は、院長の許可なしに外出することを固く禁じられ、違反した場合には罰金が科されてもいます。

ペスト患者を診断する医師たちやペスト病院の管理人たちは、当然、疫病の蔓延を恐れる同時代の年代記作家たちや一般の都市住民とはまた違った視点で疫病を観察しています。例えば、アウクスブルクの都市医師として従事し、医療体制の確立にも大きな役割を果たした A. P. ガッサー (1505-77) は、1563 年のペスト禍について短い論述を残しています。そこにはペストに対する恐怖や患者への同情を示す感情的な言葉はなく、都市の埋葬規定やペスト病院の人件費などについて、淡々と事実が列挙されています。具体的な数値が報告されることも多く、例えば 1564 年には都市全体で 2,542 名が亡くなり、そのうちの 925 名がペストによるものであり、「そのうち 333 名が、都市共同体の痲瘡院、およびペスト病院にて亡くなった」といった具合です⁵²⁾。感染症への恐れや克服のための神の祈りなどはなく、実践的な報告書という性格が前面に出た内容であり、疫病認識の変化を良く表していると言えるでしょう。

おわりに — 今後の課題

ここまで、帝国都市アウクスブルクを繰り返し襲ったペスト被害を通時的に考察し、さらに 15 世紀末から 16 世紀初頭にかけて、とくにペスト病院の設立に代表される都市の本格的なペスト対策の始動について論じた拙論を紹介してきました。結論はぜひそれぞれの論文をご参照いただければ幸いです。最後に、今後の課題を展望して結びにしたいと思います。

まず確認できたことは、疫病の歴史を考えるさいの通時的考察の重要性です。とくにペストのように数百年にわたって流行を繰り返した感染症については、長期的な視点からのアプローチが欠かせません。また、疫病の繰り返しがどう社会を変化させたのかを問うさいには、対象を限定し、一つの都市に焦点を絞

52) 渡邊「ペスト患者へのまなざし」, 28-29 頁。

る手法が有効であることもわかりました。さらに重要なのは、ペストの蔓延期にだけ注目するのではなく、ペストが流行っていない時期に、都市社会が次に襲ってくるペスト禍に対しどのような対策や準備を講じたのかを問う視点をもつことです。

ペストに代表される疫病の歴史研究は、被害にあった地域や時代にのみ焦点をあてる傾向がどうしても顕著になりがちです。しかし、疫病が蔓延していない常態時における公衆衛生や健康ポリツァイの展開を視野に収めることで、従来の疫病研究では見過ごされてきた都市のペスト対策の全体像へのアプローチが可能になるはずで、この作業をつうじて、新型コロナや今後の「未知の感染症」への対策という将来的な人類史上の課題についても、歴史的な示唆や新たな視座を提示することが可能にもなると思います。新型コロナ感染症の世界的感染拡大とそれによる社会の変化についても、とくに流行拡大期と拡大期の狭間で各国の政府がどのような対策を講じたかといった論点について、長期的な視点から、客観的に評価すべき時が来ているのではないのでしょうか。

当然、課題も多くあります。今回はアウクスブルクに焦点をしぼりペスト被害の通時的な考察を行い、数百年の間に繰り返し発生したペストの経験の積み重ねが都市の疫病対策の展開にも大きな影響を及ぼした点に注目をしました。しかし、視点をより広くすると、当然、他都市との比較や疫病対策上の影響関係についても論じる必要があります。とくに、疫病史上で重要視されている北イタリアで確立した検疫制度など、アウクスブルクは当時ヴェネツィアをはじめとした北イタリア都市と活発な交流をもっていただけに、その影響関係については今後さらに検討していく必要があります⁵³⁾。今後の課題にしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

53) 例えば、カルロ・M・チボラ（日野秀逸訳）『ペストと都市国家 ルネサンスの公衆衛生と医師』平凡社、1988年など。さらに巨視的な視点から、疫病と公衆衛生の関係についてアジアとヨーロッパを比較考察する作業も重要になってくるかと思われます。この点については、永島剛「疫病と公衆衛生の歴史—西欧と日本—」秋田茂／脇村孝平編『人口と健康の世界史』ミネルヴァ書房、2020年；同「感染症・検疫・国際社会」『岩波講座世界歴史 11 構造化される世界 14～19世紀』岩波書店、2022年をご参考ください。

(付記) 本研究は福岡大学の研究助成によるものです。(課題番号 223004-000)

本稿は、2022年10月15日に成城大学経済研究所での公開講演の内容をもとにした講演録です。講演後の質疑応答の議論なども踏まえ、内容は適宜修正および加筆をしておりますが、論旨に大きな変更はございません。研究所長の立川潔先生はじめ運営の先生方および講演会の準備をしてくださった事務局の皆様、また今回貴重な公開講演のきっかけを作っていただいた成城大学経済学部青木健先生に、そして当日お話を聞きに来てくださった参加者の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

(わたなべ・ゆういち 福岡大学人文学部准教授)